

# 情報環境学の船出

(文部省放送教育開発センター) 大橋 力

専門の壁を打破し、既成の学問や技術の空白地帯から新しい問題解決の方法をつくり出すとくみが続けている私にとって、筑波大学環境科学研究科は特別に恵まれた環境でした。心から感謝しております。

皆様にお世話になりました筑波での10年の歩みを最後に大きくまとめるように浮上してきたテーマが、環境をとらえる尺度の問題でした。これを情報環境学という枠組みに体系化し、書物として社会的に船出させるところまでこぎつけ、ほっとしているところです。

ごぞんじのとおり、現在環境問題へ接近するには、“もの”の側からのアプローチと“こころ”の側からのアプローチと、ふたつの道が与えられています。しかし、私たちの属する近現代的な知の体系下では、このふたつのアプローチは基本的に切りはなされているという問題があります。たとえば、地球環境問題に象徴される物質文明への批判から、精神世界への注目が高まりを見せてきました。ところが、“こころ”の問題へのアプローチは、“こころ”の世界専用のやり方というものが権威をもっていて、なかなかそれ以外のアプローチが成り立ちません。その結果、社会的・現実的な影響力が、物質的な豊かさを導きだした“もの”の側からのアプローチに遠く及ばないというようなことが起こっています。

“もの”の領域と“こころ”の領域とを切りはなし、それぞれを独自に操作可能ならしめることによる知的生産性の向上は、デカルトに象徴される近代合理主義的学術体制の残した偉大な遺産であることはたしかです。この枠組みは実利をともなう高度な説得力でわれわれを支配し、“もの”と“こころ”とそれぞれの分野をさらにとめどもなく細分化させる専門化社会を導き出しました。その効能はたしかに絶大なものですが、完全無欠とはいええず、むしろ現在では、その限界をあらわにしていることは否定できません。いまや、地球環境問題や精神的荒廃の問題に代表される巨大な負の遺産をつみ重ねているとってよいでしょう。

デカルト的な縦割り発想の被害の深刻さは、その二律背反性であり回復困難性ではないかと思えます。“もの”で行きづまったから今度は“こころ”というとき、これまで信奉されてきた“もの”からのアプローチは当然のように否定され、単に対象が“もの”から“こころ”に入れ替わっただけの、あいかわらず一面的で専門的なアプローチがふたたび始まっています。しかも、このような高度専門的学問ないし技術が行きづまったとしても、当事者を直ちにほかの専門領域のプロに再生することは、現在のやり方ではほぼ絶望的に無理なのではないでしょうか。

この「“もの”と“こころ”との乖理」「専門依存」という近現代の知の体系がもつ同根の

病を克服する道を探ること、いいかえれば「“もの”と“ところ”との架橋」「専門の檻からの脱出」への道を拓くこと、これが筑波時代の私にとっての究極の課題でした。私はこれを、「情報環境学」という新しい学問体系を構築するというかたちで進めることにしたわけです。

こうしたアプローチは、決して平易な歩みではなく、特に当初、かなりの抵抗があったことは事実です。道なき道を切り拓くむずかしさだけでなく、周囲の目も厳しいものがありました。「専門外に目を向けるとはなにごとか」「異端ではないか」といった批判から、当人にとっては中傷か迫害としか思えないような事態にいたるまで、いつも危機ととなり合わせだったかもしれません。しかし、学際性を標榜する筑波大学に身をおくことは、この点ではいわば平和憲法にまもられているようなものでした。しかも、初代辰巳修三研究科長がうち出した環境科学研究科の路線は、開かれた筑波大学の中でもいわゆる学問のタコツボ化を粉砕する先頭に立つ立場をとるといえるものだったことはごぞんじのとおりです。その中で私を理解し、公然と、あるいはひそかに支持くださる方々がすくなくならずいらっしやったことは、本当に幸運でした。おかげ様で研究の進展に伴う醍醐味がすこしずつ増していくのを感じながら、この一連の研究を徐々に大きな流れに成長させていくことができました。

それに関連して忘れることができないのは、科研費プロジェクトのことです。最初は、環境科学特別研究の中で東大工学部教授山崎弘郎先生が中心にすすめていらっしやる『多次元物理計測班』の仲間に入れていただき、昭和60年～61年の2年間音を材料として“もの”と“ところ”とを結びつける最初の研究に取り組み、一連の研究の糸口をひらくことができました。ひき続き、昭和62年～平成元年の3年間、重点領域研究「人間環境系」のプロジェクト『高密度生活空間の音環境における高周波音の生理的・心理的機能と環境質評価班』の代表者としてより発展したレベルでの研究を展開し、つづいて今年からは、同じく重点領域研究「人間環境系」の後期、『計画研究班』に入れていただいて3年間の予定で『情報環境の最適化と制御』について研究を進めています。こうしてみると、一貫したテーマのもとに、切れ目なく都合8年間にわたって科研費による研究を続けることになり、われながらびっくりしています。

筑波大学ならではのこのような状況の中で展開した情報環境への10年のアプローチの基本的な一半の部分は、最初に述べたように一冊の書物にとりまとめ、『情報環境学』のタイトルで昨年11月朝倉書店から刊行することができました。まことに至らない著作ではありますが、私として非常に思いがけなかったことは、初版が2ヶ月を経ずに売切れ、再版となったことです。振り返ってみると、研究をスタートした時には異端としてわずかばかりの“負の関心”を持たれるのがせいぜいだった私のアプローチが、このようなかたちで社会に受け入れられるようになったことに、驚いています。筑波という恵まれた環境で研究を進めることができ、社会の見る目の転換する日を待つことができたのは、まことに幸運というほかはありません。

このような研究を通して、筑波大学に限らず様々な大学その他の組織の卓抜した才能をお

持ちの方々との結びつきも次々と生まれてきました。そうした中で、たまたま縁があって、昨年、文部省の大学共同利用機関である放送教育開発センターに移ることになりました。ここは、英文名称でいうと National Institute of Multimedia Education。その名の通り、オーディオ、ビジュアル、コンピューター、衛星といったニューメディアを駆使して次世代のコミュニケーションの研究開発を進めようという先端的国立研究機関です。私の研究にとりましても、ちょうどこれまでよりはるかに大規模な設備と巨額の予算とが必要になった時期に、新しい職場で本格的に仕事のできる環境を与えられ、まことに時宣を得たと思っております。

しかしながら、センターに移ってからすこし不便になったことは、筑波大学に比べて、ここでは、自然科学関係の先生方が、まだあまり多くはいらっしゃらないことです。センターは大学共同利用機関でもありますので、現在、センター以外の方々とやや大型の共同研究プロジェクトを起動しはじめたところです。このような点でも筑波大学の諸先生方に、これからもお力添えをたまわりたく思っております。どうぞよろしく願いいたします。